都小特活
第100号
東京都小学校
特別活動研究会
平成29年3月発行
発行人
山口祐一

◎平成28年度◎

東京都小学校特別活動研究会

研究発表大会

平成28年度東京都小学校特別活動研究会の研究発表大会が、去る２月17日（金）に、江戸川区東部フレンドホールを会場として開催された。本研究会では、「自己有用感を高める望ましい集団活動」を研究主題に研究を進めてきた。今年度はその初年度として、研究の基調提案を受け、学級活動部、児童会活動部、クラブ活動部、学校行事部の４つの活動部会が研究を深めてきた。

研究発表大会の概要は、次の通りである。

会長　山口祐一
（江戸川区立第四葛西小学校長）

熱気にあふれた研究大会

年末の多用の中にもかかわらず、全国各地から約150名の方にご参会いただいた。次期学習指導要領改訂のキーワードである「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の育成に向けて、特別活動が担う役割への期待の大きさが感じられる大会となった。

大会は、開会の言葉に続き、山口会長から次のような挨拶があった。

次期学習指導要領の改訂の趣旨から、小学６年生の時に柔道を習い始めた道場に飾られていた額にかかれていた言葉を思い出した。それは、講道館柔道の創始者である嘉納治五郎師範の『精力善用・自他共栄』という言葉である。この言葉は、「心身の力を最も有効に社会のために使う。そして、相手を敬い、感謝することで助け合う心を育み、他者と共に社会の繁栄に尽くすことになる。」という意味である。今、教師として特別活動を推進する中で、改めてこの言葉の意味を考えた。海外でも「ＴＯＫＫＡＴＵ」として注目されている中、本会が特別活動に対する理解と実践を広める使命を十二分に発揮していきたい。

続いて、ご多用の中ご列席いただいた来賓、顧問の先生方がご紹介された後、佐野研究部長より研究基調報告がされた。その後、各活動部がそれぞれ創意工夫を凝らして１年間の研究内容や成果・課題の発表を行った。（詳細は、２・３ページ参照）

最後に、文部科学省初等中等教育局教科調査官　阿部　恭子先生から『自己有用感を高める特別活動』について、ご講演いただいた。「豊かなかかわりと自己有用感」や「これからの教育課程の理念」、「特別活動において育成する力」など、次期学習指導要領の改訂のポイントや指導の充実に向けた数多くのご示唆をいただいた。（詳細は、４ページ参照）

研究発表大会次第

進行　庶務部長　秋山　美栄子

（1）開会の言葉　　副会長　持田　裕代

（2）あいさつ　　会長　山口　祐一

（3）来賓あいさつ・紹介

（4）基調報告　　研究部長　佐野　匡

（5）研究発表　　司会　研究副部長　岡野　範嗣

○学級活動部
『もち味を生かし、互いに認め合い、高め合う学級活動』

○児童会活動部
『互いを認め合う異年齢交流を深める児童会活動』

○クラブ活動部
『個性を発揮し、認め合うクラブ活動の指導』

○学校行事部
『自分のよさや役割に気付き、互いに認め合い、活かし合う学校行事の工夫』

（6）講評　　江戸川区教育委員会
指導主事　森川　康一　先生

（7）記念講演
『自己有用感を高める特別活動』
文部科学省初等中等教育局教科調査官
安部　恭子　先生

（8）閉会のことば　　副会長　清水　晶子

◎学級活動部◎

『もち味を生かし、互いに認め合い、高め合う学級活動』

1　発表者

二本木　　基　教　　諭（町田市立南大谷小）
佐藤麻美　教　　諭（東久留米市立第六小）
金澤勇輝　教　　諭（大田区立馬込小）
兼近真慈　主任教諭（葛飾区立西小菅小）

2　研究発表

（1）研究内容

「自分は人の役に立っている」「自分は人に認められている」などを自己有用感の高まった児童と設定し、「自己有用感を高めるための可視化」と「互いに認め合い高め合うための活動の充実」を視点に研究を重ねてきた。

（2）手だての具体例

○可視化の工夫
・自分らしさや持ち味の可視化
・児童一人一人の思いの可視化
・児童が創り出す学級会グッズ
・みんなの思いを集約した学級の目標づくり
○活動の充実に向けて
・話合い中の適切な助言
・終末の助言の改善　　・係活動の充実

これらの手だてをとることで、「自己有用感を高める望ましい集団活動」につながると考え、実践した。

3　研究の成果と今後の課題

〈成　果〉

○一人一人の活躍の場が広がり「人の役に立っている」「友達から認められている」という思いをもち、自己有用感につながった。
○それぞれの学級で工夫した掲示物・配付物・板書などを見合ったり紹介し合ったりすることができた。
○授業者は、学級経営と関連して、教師自身の思いだけではなく、児童とともに「どんな学級をつくっていくのか」を考えていく姿勢を学ぶことができた。

〈課　題〉

○今まで学級活動部で実践してきた「要素カード」「終末の助言」「中途助言」などの取り扱いに曖昧な部分が見られた。本来の目的・使用方法を改めて誤解のないように伝えていきたい。

◎児童会活動部◎

『互いを認め合う異年齢交流を深める児童会活動』

1　発表者

渋井洋子　指導教諭（東久留米市立南町小）
宮田有江　主任教諭（世田谷区立喜多見小）
森脇雄史　教　　諭（東久留米市立南町小）

2　研究発表

（1）研究内容

児童会活動における自己有用感を「自分は必要とされている」「自分は役に立っている」と思える感情と定義し、それは他者に認められてはじめて得られるものであると考えた。その中で児童の自己有用感を高めるためには、「あこがれ」や「思いやり」の気持ちを可視化して伝えることや、場の設定を工夫することが必要である。「あこがれ」と「思いやり」のスパイラルを意識した異年齢交流を積み重ねることで、自己有用感が育ち、高まり、よりよい人間関係を築くことができると考えた。

（2）検証授業

世田谷区立喜多見小学校・代表委員会

東久留米市立南町小学校・集会委員会

毎回ふり返りを行うことで、全校児童が交流する活動や全校児童の思いを受け止めた活動につながることがわかった。

3　研究の成果と今後の課題

〈成　果〉

○「メッセージボード」を活用し、「あこがれ」と「思いやり」を可視化することを通して、相手意識が育ち、自己有用感につながることがわかった。

〈課　題〉

○内容が、「あこがれ」と「思いやり」の視点に迫れるように、具体的な手だてを探る必要がある。基本的な代表委員会や委員会活動の在り方について見直し、より多くの学校に広めていきたい。

◎クラブ活動部◎

『個性を発揮し、認め合うクラブ活動の指導』

1　発表者

中　本　健太郎　教　　諭（目黒区立鷹番小）
瀧　上　怜　子　教　　諭（品川区立大井第一小）
島　田　泰　子　教　　諭（墨田区立曳舟小）
土　屋　真　紀　教　　諭（墨田区立曳舟小）
加　藤　葉　子　教　　諭（江戸川区立第四葛西小）
矢　部　　聡　教　　諭（江戸川区立東葛西小）
藤　井　美貴子　教　　諭（世田谷区立中町小）
山　口　哲　郎　教　　諭（葛飾区立本田小）

2　研究発表

（1）研究内容

本研究部では、「個性」とは集団の中でよりよく発揮され、他者と協調できる個性であると考える。児童が望ましい集団活動を通して、互いの個性に気付き、その多様なよさを集団の中で発揮することで、自己有用感が高まると考える。児童が様々な活動の場面で、より幅広い視点で、自他の個性に気付けるような手だてを考えた。また、児童がどのように変容したのかを見取ったり、教師が児童理解を深め指導に生かしたりする手だてについても、実践を通して追究した。

視点1　望ましい集団活動をよりよく展開する可視化の工夫

視点2　自他の個性に気付き、認め合う振り返りの工夫

（2）授業実践

江戸川区立第四葛西小学校　演劇クラブ
品川区立大井第一小学校　ミニサッカークラブ
墨田区立曳舟小学校　ビーチボールバレークラブ

3　研究の成果と今後の課題

〈成　果〉

○クラブの目標や毎時間のめあてを掲示し可視化することは、全員で目標を意識して活動したり振り返ったりすることにつながることが分かった。

○教師がよいところの視点に気付かせたり、賞賛し価値付けたりすることで、児童が自分や友達のよさに気付くことができるようになることが分かった。

〈課　題〉

○個や集団がどのように変容したのかを児童の具体的な姿で見取り、自己有用感が高まったか検証する方法を研究すること。

◎学校行事部◎

『自分のよさや役割に気付き、互いに認め合い、活かし合う学校行事の工夫』

1　発表者

中　西　くみ子　主任教諭（北区立田端小）
清　水　大　翼　教　　諭（中央区立常磐小）
松　本　明　子　主任教諭（北区立稲田小）
上　原　陽　介　主任教諭（東久留米市立第十小）
原　田　恵　子　主任教諭（大田区立入新井第一小）

2　研究発表

（1）研究内容

研究主題の実現に向け、互いのよさや役割に気付き、認め合い、活かし合う学校行事の工夫を研究内容とした。

（2）研究授業

事例1　文化的行事〔学芸会の事後指導〕……6年
事例2　文化的行事〔展覧会の事前指導〕……2年
事例3　文化的行事〔学習発表会の事後指導〕…4年

（3）研究の視点

視点1　行事のつながりの中で、活動の見透しや自分の目標をもつことができる指導の工夫

視点2　自己有用感を感じられる振り返りの場や観点の工夫

視点3　自己有用感を高めるための可視化の工夫と活用

3　研究の成果と今後の課題

〈成　果〉

○意図的・計画的に行事に取り組ませることで、自分の役割にやりがいや責任を感じる姿が見られた。事前事後指導を重視し、互いの活動を可視化することで、役に立てたという思いを高めることができた。

〈課　題〉

○達成感・自己肯定感を高める指導から、「自己有用感」を高める指導にしていくためには、指導者としてどのような手だてが必要なのかについて、さらに研究を進めていく。

都小特活研究発表大会記念講演

講　演／「自己有用感を高める特別活動」

講　師／文部科学省初等中等教育局　教育課程課
教科調査官　安部　恭子　先生

1　はじめに

平成29年2月14日、学習指導要領案が公表された。新聞記事では、特別活動に関して、キャリア教育の要、主権者として社会に参画する力、多様な他者と協働する力、合意形成を図ったり意思決定をしたりする力を育むなどのことが掲載された。

2　豊かな関わり合いと自己有用感

今年度の本会の研究主題は「自己有用感を高める望ましい集団活動」であるが、自尊感情と自己有用感について考えてみると、自尊感情とは自己評価が中心であり、自己有用感は人の役に立った、人に喜んでもらえたなどの他者からの評価が中心となる。自己有用感の獲得が自尊感情の獲得につながる。しかし、自尊感情が高いことは必ずしも自己有用感が高いことではなく、その基盤に人間関係がある。豊かな関わりや役割を担うことを通して、健全な自尊感情が育つとともに、自分の居場所ができ、活動意欲が高まっていく。そのためには自己評価だけでなく、相互評価や教師からの評価も大切となってくる。他者と豊かに関わり、役割を担い、責任をもってやり遂げ、自身の達成感につなげていきたい。

一人一人のよさに気付き認め合う「代表委員会の取組」や、上学年が憧れの存在やモデルとなる「異年齢交流活動」「縦割り活動」等、様々な集団活動の中で、どのように役割や責任をもたせるかが大切である。また、目標を立てて取り組み、振り返りを次の活動や課題解決に生かすこと、学校生活を通して、友達や先生との関わりや様々な経験から自分のよさや個性を感じ、それを生かしてさらにがんばった、役に立ったという経験を積ませていくことが必要である。

3　これからの教育課題の理念

少子高齢化、グローバル化、AIの成長…と将来の変化が大きいこれからの時代。子供たちが新しい時代を生き抜くために必要な資質・能力を確実に育成することが求められている。これからの教育課程をキーワードで表すと「社会に開かれた教育課程」である。よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという目標を学校と社会で共有し、連携・協働しながら実現を図るものである。“こんな子供たちを育てたい”という学校教育のねらいを地域と社会とで共有化し、地域人材や地域の資源を活用するなど、教育課程を工夫していくことが重要となる。

子供たちに育成すべき資質・能力の三つの柱は「知識・技能」(何を理解しているか、何ができるか)、「思考力・判断力・表現力等」(理解していること・できることをどう使うか)、「学びに向かう力・人間性等」(どのように社会、世界と関わりよりよい人生を送るか)であり、この三つの柱は相互に関連し合いながら育成される。

4　特別活動における学習指導要領改訂のポイント

〈現行学習指導要領の成果と課題、期待されること〉

中央教育審議会答申では現行学習指導要領の成果として、特別活動の実践により、よりよい人間関係や社会に参画する態度、自治的能力が育成されること、生活集団・学習集団としての基盤となること、学力との相関があることとして、学級文化・学校文化・特色ある学校づくりにつながることなどが挙げられた。一方、課題及び期待されることとして、学習過程の明確化、各活動の関係性や意義、役割の整理、自治的能力のさらなる育成、キャリア教育の中核的な役割を果たすことなどが挙げられた。

子供たちの人間関係や社会性が広がるにつれ、「学級活動」で身に付けた力は、職場・家庭を支える基盤となり、「児童会活動」は、生徒会活動や地域社会の自治的活動につながっていく。「クラブ活動」は、サークルなど自治的な活動の運営基盤となり、「学校行事」は、地域の行事・催しなど目標に向けて進んでいく集団活動につながっていく。このように特別活動の各活動・学校行事の実践を通して汎用的な能力が身に付くのであり、子供たちが社会を生きていく上で特別活動の果たす役割は大きい。

現行の学習指導要領でも重視してきたことであるが、様々な集団活動に自主的・実践的に取り組むことを通して、人間関係をよりよくしていくことが求められる。そして今回の改訂では、学校教育全体で行うキャリア教育の充実について、その中核としての特別活動の役割が明確に示されたことから、小・中・高等学校を通じて、学級活動・ホームルーム活動に一人一人のキャリア形成と実現に関する内容を位置付けた。キャリア形成に関わって、なりたい自分に向けて努力したり、目標をもって自己実現を図ったりすることが求められる。

〈各教科等の特質に応じた見方・考え方〉

「見方・考え方」とは、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方のことであり、特別活動においては「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせ、各教科等との往還関係の中で、身に付けた見方・考え方を総合的に活用するものである。特別活動の各活動・学校行事において基盤となるのは、学級活動である。「決めたことを実践する」ことが重要であることはもちろんであるが、これからはプロセスにも目を向け、実践に向けてどのように子供たちの力を育むかを意識するとともに、活動を振り返り、課題を次の活動に生かしていく必要がある。

〈特別活動の目標〉

特別活動においては、幼児教育や他教科等との関係性も意識しつつ、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の三つの視点を手掛かりとしながら、目標や内容を「知識・技能」等の三つの柱に沿って整理した。目標については、案では「様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら、課題を解決することを通して、次の資質・能力を育成することを目指す」としている。(1)知識・技能として、多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動する上で必要なことの理解や行動の仕方、どんなことを理解し、力を付けさせたいかを具体的にし、身に付けるようにする。(2)思考力・判断力・表現力等として、集団や自己の生活、人間関係の課題を見いだし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。そして、(3)学びに向かう力・人間性等として、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成し、自己の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養うこととしている。

〈学級活動の内容構成〉

学習指導要領案では、自治的能力の育成を重視し、議題の発見を含め児童生徒主体の話合いを通じて行うことや、学級活動(1)を中心に学級経営との関連を図ることを明確にした。また、キャリア教育の視点から小・中・高等学校のつながりが明確になるように、小学校に(3)を設定した。集団活動において役割を果たす過程で主体的に思考・判断・実践することが、自己有用感につながり、子供たちの自治的能力や主権者として社会に参画する力の育成につながる。

〈学級経営との関連、学級活動の充実〉

子供たちにとっての学校は、未来の社会に向けた準備段階の場であり、現実の社会で毎日の生活を築き上げていく場でもある。特別活動の実践により、日々の生活を共にする基礎的な集団である学級を豊かにすることが大切である。様々な集団活動を通して、互いのよさや可能性を発揮しながら、集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、自治的能力や主権者として積極的に社会参画する力を育成していく。学級活動(1)などの自治的な活動を中心に学級経営との関連を図ることにより、子供たちの学校生活が充実し、学びに向かう力も高まっていく。学級活動の充実に向けて、大切なことは必要感のある議題選定や決まっていることの明確化、提案理由に基づいた話合いである。また、思考を整理し可視化するための板書の工夫、分類・整理し分かりやすくする短冊の活用、多様な意見のよさを生かしながら折り合いをつけて合意形成することも大切であり、学級活動の充実へとつながっていく。一年間の学級のあゆみの掲示などにより、経験したことを生かしたり想起したりすることや、自分がどのように取り組んだのかを振り返らせ、よりよい学級生活を共につくっていくという意識を育んでほしい。

5　おわりに

特別活動の充実は、子供たち自身で生活をつくるという点で、いじめの未然防止につながるとともに、学力の向上や自己有用感を育むことにつながる。そして、多様な他者や集団・社会と関わり、学んだ知識や技能、価値観などを活用しながら、実生活や実社会でよりよくいきていく力を子供たちが身に付けるようにしてほしい。

編　集　後　記

会報100号をお届けします。年度末のご多用の中、ご協力いただきました諸先生方に、深く感謝いたします。

（編集部：赤羽根、篠、石田、大野、藤井、酒井）